



TITLE:

[書評] 劉若愚「詞」の文學的特質 趙葉嘉瑩「吳文英の「詞」：現代的な視點から」

AUTHOR(S):

高橋, 文治

---

CITATION:

高橋, 文治. [書評] 劉若愚「詞」の文學的特質 趙葉嘉瑩「吳文英の「詞」：現代的な視點から」. 中國文學報 1976, 26: 125-130

ISSUE DATE:

1976-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177315>

RIGHT:

Some Literary Qualities of the Lyric (Tz'u)

James J. Y. Liu

劉若愚「『詞』の文學的特質」

Wu Wen-ying's Tz'u: A Modern View.

Chia-ying Yeh Chao

趙葉嘉瑩「吳文英の『詞』——現代的な視點から——」

カリフォルニア大學の論文集には、「詞」に關しての論文が二つおめられてゐる。一つは劉若愚氏による「Some Literary Qualities of the Lyric」であつ、もう一つは趙葉嘉瑩女史による「Wu Wen-ying's Tz'u: A Modern View」である。

趙葉嘉瑩女史の論文は吳文英の「詞」を現代的な視點から再評價しようとしたものである。元來、吳文英は難解を

もって知られ、評價も様々だったようだが、女史は吳文英に好意的だった人々に對しても、誤讀のため正しい評價をし得なかった、と述べておられる。このことだけからも女史の吳文英に對する愛情と情熱は十分うかがうことができるのだが、議論のすみずみからそうした愛情が響いてくるのを讀者は感じずにはいないだろう。

女史の論點は、吳文英の使った詩法がいかに近代ヨーロッパの文學者達のそれと似通ったものであったか、と云う點にある。女史の述べる所によると、吳文英のそうした近代的性格が中國における彼の評價のたいへんなさまたげになっていた、と云うのである。その近代的性格の現われとして女史は、吳文英がしばしば中國の傳統的ロジックを無視すること、單純なロジックではわりきれない感覺的な關連による美が彼の「詞」の中にあることなどを指摘している。それは具體的には、時間や場所の關係を無視したり、特殊な典故や辭類による特殊なイメージをさすらしいのだが、女史は論文の中でそのことを實際に二つの「詞」を解明しながら説いてゆこうとしている。論文の重要な部分は

この二つの「詞」の解明で占められており、またそれは新資料、つまり地方志を驅使してのたいへんな勞作であるのだが、讀者の側としてそれに對し一體どんな口だしをすることができようか。と云うのは、もともと詩の解釋は、特にその詩が難解であればある程、これが唯一無二の絶對的な解釋だとは云えない曖昧さが常につきまとうからである。殊に、趙葉嘉瑩女史の吳文英に對する深い愛情を前にしてはなおさらである。したがってここでは女史の「詞」の解釋には一切ふれないつもりであるが、しかし女史の論文そのものに疑問がないわけではない。

それは、女史は再三再四「吳文英の『詞』における近代性」と云うことを述べておられながら、その近代性がいかなるものであるかは全く觸れてはおられない點である。確かに「彼の『詞』は中國の傳統的ロジックによらず、時間や場所の關係をしばしば無視する云々」と述べてはおられる。しかしそれはいたって外面的なこと、彼がなぜそのような表現をとらなければならなかったか、と云うような、いわば彼の近代人としての「核」と云ったようなも

のは一切説かれていない。したがっていいのわるい見方をすれば、女史は單に吳文英の「詞」が近代ヨーロッパの詩に似ている所があるから、それで彼を近代人的と規定した、と見れないわけではない。もちろんそれは下衆のカングリなのかもしれない。しかし私には、彼の詩人としての「核」をとらえることなくしては、近代的と云う議論それ自體が成立しないように思える。私としては、女史に吳文英のもっと多くの「詞」に觸れながら、彼がいかなる近代人的な「核」の持ち主であったかをときほぐしてほしかった。その後にはじめて、近代ヨーロッパとの比較も成立するであろう。

女史の論文は、今まであまり用いらなかった資料、つまり地方志を活用しての勞作ではあったけれど、吳文英の近代人としての「核」をとき明かすことがなかったために結局はあまり成功してはいなかったと思う。實際、私の個人的な感想を云わせてもらえらるならば、女史の論文を読んだ後でも、女史の解明のおかげで吳文英の「詞」をすばらしい、と思ったことは一度もなかった。

#### 書 評

順序が逆になってしまったが、劉若愚氏の論文は唐末五代・北宋初の「詞」を中心に、「詞」が本來どのような特質をもっていたかを明らかにしようとしたものである。方法論的には、「詞」がどのような詩世界をもちえたか、またそれはどのような詩言語によっていたか、を「詩」との比較から分析しようとしたもので、氏は論文の冒頭で音楽的な面からのアプローチは一切さけると明言されている。それは一つには樂譜が残っていないから、さらに詩人自身も音楽にあまり注意をはらわなかった場合が多いからだ、と説明されている。このことに多少問題がないわけではない。だが先ず氏の議論の要點を説明すると、氏は具體的な作品を検討した結果、「詞」の詩世界の一般的特徴として次の三つをあげておられる。

- 一、「詞」には杜甫の「歌行」や白居易の「新樂府」のような社會的・政治的な題材をあつかったものはない。
- 一、「詞」には李賀や李商隱のような超自然をうたったものはない。

- 一、「詞」には陶淵明や王維のような自然をうたったもの

のはい。

そして以上のことから、「詞」は本來個人に關わる感傷的問題をあつかう詩である、と結論されている。またコトバの問題、つまり「詞」はどのような詩言語を用いたか、と云うことについて、氏は口語的なもの、エレガントな用語のもの、文言的なもの、と「詞」の言語を三つのスタイルに分類し、それぞれに對し、戀愛をうたうもの、アンニュイやメランコリーをうたうもの、哲學的内容のもの、と各々のスタイルに一般的にみられる題材を分析しておられる。以上が氏の議論のあらましである。

まず小さなことではあるが私の感じた疑問を提出すると、氏は「詞」が社會的・政治的な詩世界を持ち得なかったとし、その理由として「詞」は元來が物語や諷刺にむかないものとされている。しかし、劉若愚氏も分析しておられるとおり口語的なコトバによる「詞」の多くは戀愛、それめかなりエロティックなものをうたうのだけれども、それだけではなく諷刺的な戯歌<sup>・</sup>めかなりあったらしいことは田中謙二博士が「元代散曲の研究」の中で述べておられる。

ただ中國文學に於ては、そうしたものの多くは亡んでしまふ運命にあるから今日にはほとんど傳わっていない。もちろんそれらの作品は杜甫の「歌行」や白居易の「新樂府」のように生まじめなものではなかったし、諷刺の型としても性格を全く異にするものではあった。しかしそこにあるより尖锐な諷刺の精神は恐らく口語的なコトバによってのみ可能なものであったろうし、確かに一代後の元代に至って時代の支えを受け一つの新しい文學世界を築きあげた散曲の持つ精神であったかもしれないが、宋代に於てもそうした「詞」が存在していたことは「詞」が本來どのような性質のものであったかを考える上で無視できない事実だと思ふ。つまり「詞」はけっして諷刺にむかなかつたわけではない、ただそれらがあまりに口語的で特殊だったため今日に傳わらなかつただけなのである。

ともあれ、私が今述べたことを考えに入れたとしても、氏の出した結論は猶、誰にでもうなづくことのできる妥當なものである。だが私はここで劉氏の議論そのものに對する疑問を提出したい。

それは氏が「詞」の本来の性質をさぐる上で用いた方法である。氏は「詞」を「詩」と比較して結論をくだされているが、そもそもそうした方法が「詞」の本質をさぐる上で一體どれ程役だつだろうか。「詩」は「樂府」・「古詩」・「近體詩」と様々なスタイルとムードをもっており、また、それぞれのスタイルが流行した時代も異なっている。その上それぞれがそれぞれの時代精神を反映したものであったはずである。「詞」はそれらが流行したどの時代とも異なる時代のものであるから、當然そこにある精神も異なるものであろうが、まず第一に、「詩」に關してそうした分析を何ら加えずに「詞」と比較することは、明らかに片手落ちで比較の意味をなさないように思うし、また、それらを比較しても恐らく外面的な差違をチェックする結果になるだけで、何ら「詞」の本質に觸れることにはならないような氣がする。おかしなたとえをひくようだが、赤い色を知らない人間に赤を教えるとして、赤以外のすべての色を見せて、「赤はこの色ではない、赤はこの色でもない」と云つても無駄なように、つまり赤を教えるには赤を見せるし

かないように、「詞」の本質を知るためにも「詩」と比較して「詞」にない世界を考えるよりは、「詞」それ自身を研究する方が大事なのではなからうか。もちろんこれはあくまでたとえであるから、實際はこのように圖式的にはいかないだらうし、恐らく「詩」との比較も無益ではないだらう。しかし劉若愚氏が「詩」との比較のみによつて結果をくだそうとされているのに對し、私はいささか疑問を感じずにはおれない。

また、氏は論文の冒頭に於て音樂的な面からのアプローチは一切しないと明言されているが、私にはこの宣言が「詞」の本質は考えない、と云うことと同じ意味の發言のように思われる。「詞」は本來歌われたものである。しかも中國に於ては傳統的にそうであるように先ずメロディーがあつて、しかる後に「詞」が創作されたのであるから、それは創作上たいへん大きな制約である。またそれが「詞」の創作を「填詞」とも云う所以であつた。劉氏が論文の中で説く「詞」の語法的な特徴、つまり動詞がはぶかれることが多い、とか、曖昧な句が多い、と云つた特徴も実はそ

うした音楽的な面からの制約による所も多くあるのではないだろうか。そしてそのような制約による特徴はけっして「詩」との比較から歸納されるべき性質のものではない。云うならば「詞」それ自身が「詞」として存在すること自体の中にある必然的な性質なのである。

劉若愚氏はまた、「詞」は個人的感傷をうたうものであり主題はかぎられていた、と「詩」との比較から結論されている。しかしこれもメロディーが先に存在していることを頭にいれて考えれば、メロディーが「詞」以前にもっているムードにそぐわない「詞」を作者が作るはずはない。

また歌を歌う場所と云うのは比較的にかぎられていたから、その場所にあう題材も必然的にかぎられてくるのではないだろうか。つまり詩人はしかるべき場所でしかるべき題材をしかるべき「詞」にしたのであって、もし唐末五代・北宋初と時代をかぎって云うならば、「詞」の主題はけっしてかぎられていたのではなく、むしろかぎられた主題のために「詞」はあった、と云う議論も成り立つような気がする。それを劉氏は「詩」との比較から歸納しようと

するから議論がどこでかみあわなくなるのではあるまいか。

劉若愚氏の提出した結論、つまり「詞」は個人に関わる感傷的問題をあつかう詩である、と云う結論は確かに妥當で、誰もがうなづくことのできるものではある。しかし氏の議論それ自体は、どこかで逆轉している、と云う感想を抱かざるを得ない。ぐ・ぐ・ぐな所を常にもっている。氏は「詩」との比較から何ら有益な答えを導きださなかったと思うし、また「詞」を中國に於ける「フリー・ヴァース」だなどと、とんでもないことを云うのは、音楽的制約を全く忘れていたためとしか、私には思えない。

(京都大學 高橋文治)